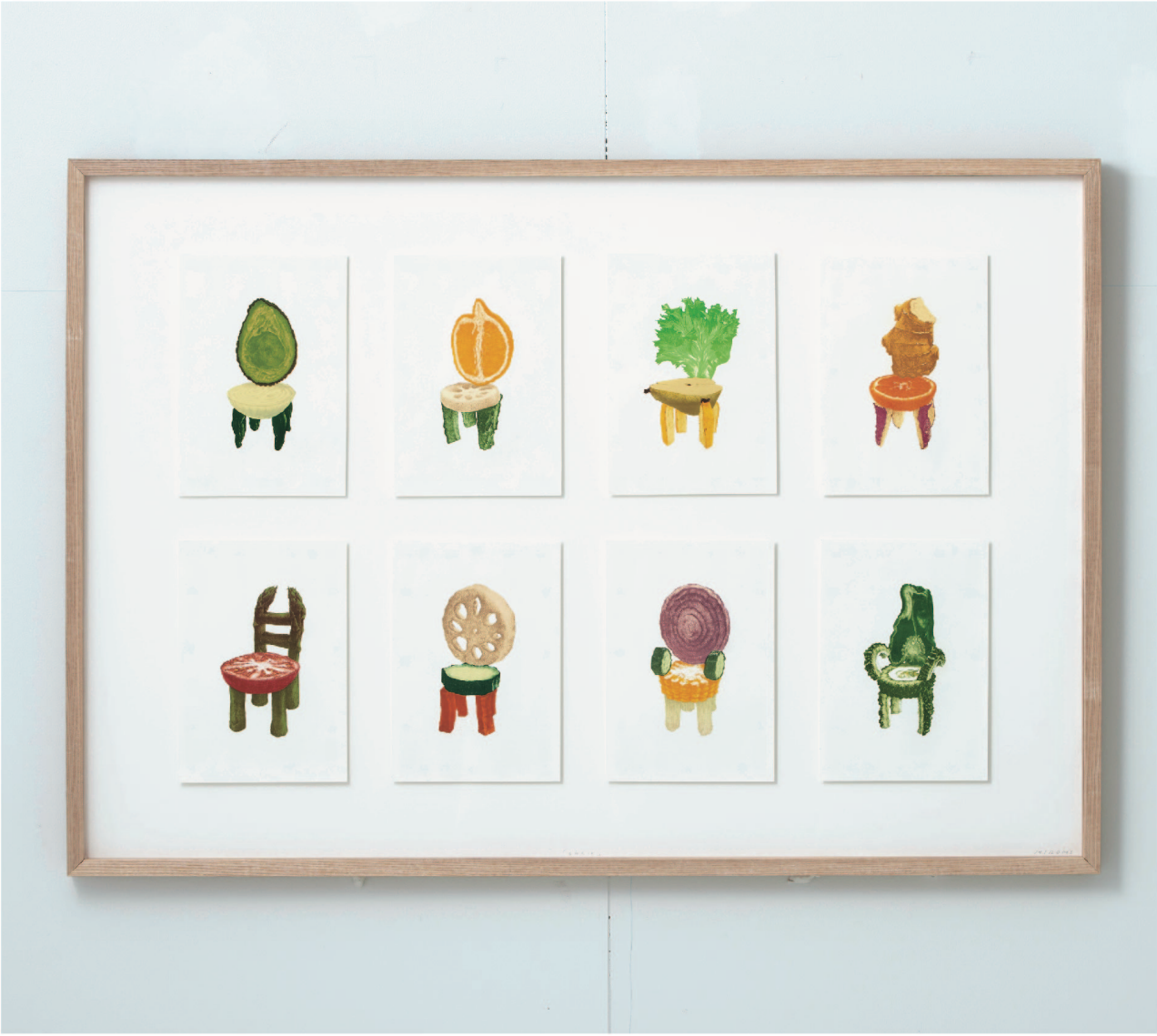
小林　弘実
KOBAYASHI Hiromi



CHAIRS

リトグラフ、ポリエステルプレート

CHAIRS

私にとっての家とは、ケアの場であるイメージが強い。それは、私が家族間において、衣食住にともなう生活のケアをしあう関係だけではなく、介助や精神的な問題をケアする/ケアされる環境へ常に置かれているためだ。介助が必要な家族と暮らすうえで、椅子はいくつも必要になる。例えば、くつろぐための椅子、食事のための椅子や入浴のための椅子など。外出のときに休憩するための椅子も必要だ。椅子は、生活の中心となる家具であり、自分の居場所を認識できるもののひとつである。その空間に自分が座ることのできる椅子があることで「自分はそこに居ても良いのだ」と漠然と肯定されている心地になり、自分の椅子がそこにあることを認識するとき、同時に自分の居場所を認識することができる。また、椅子は社会での地位や役職を表す言葉でもある。「椅子」は家の中に限らず、居場所を象徴する。

家の中での自分の居場所が生まれたときや暮らし始めたときから存在しているようでありながら実際のところそうではないように、自分にとってその環境が適しているかどうか、そして他者との関係性が自分の居場所のあり方に深く関わっ

てくる。

　これまでの作品制作では、自身のダイエット経験をきっかけに、野菜や果物をモチーフとして取り入れてきた。ものを食べることは喜びであり、苦しみでもあり、生きるために欠かせない行為である。嗜好、体質、体調や気分などをもとに日々食べるか食べないかを選択することは、「自らをケアすること」を自らに強いられていると言えるだろう。

　《CHAIRS》は、「少しでも多く、自分の居場所が欲しい」と願ったことから制作が始まった連作である。一作品ごとに、その日に食べた食材をパーツとして椅子を作り上げ、椅子が増える度に過去の生活が可視化されていく。自分の居場所を求めること、毎日の食事を組み立てる(あるいは組み立ててもらう)ことのいずれも、自己/他者へのケアが根幹にある。《CHAIRS》を通じて生活に思いを巡らすとき、どのような椅子が立ちあらわれるだろうか。